

飛び降りた清水の舞台と夢の実現

上記2冊の自費出版物を、翻訳者自ら紹介させていただきます。両作品とも、自分が利用する教材として英訳し、英会話学校で使用した結果、一般の方にも読んでいただけるようにと出版物としました。出版に際して決断は、“ONE LUMP～”では、清水の舞台から飛び降りる心境で、また“TOKIYORI”では、夢の実現に向けて心の準備をした上でのことでした。英会話学校のサム先生が「本になるよ」と言って下さったことに後押しされた決断が、思わぬ展開になったのです。

まず、“ONE LUMP～”を自費出版しただけでなく、丸善などの書店で販売していただけることになりました。さらには海外からも注文がくるという、思いがけなくも嬉しい展開となったのです。平成10年に自費で増刷した分も完売間近(残6冊)という状況です。日本の代表的な昔話を、海外の方が親しめるよう、わかりやすく翻訳したつもりです。

次に、“TOKIYORI”は平成11年10月に発行し、販売中です。『滝口入道』の流麗で美しい文章を英訳してみたいという願望に取り付かれ、翻訳したものです。英会話学校では、童話の次に、これを教材としました。この武士の物語には、日本文化のエッセンスが詰まっています。欧米人の先生方が非常に関心を示されたことが、出版への意欲に火を点けました。原作の愛読者が国内外に増えることを願いつつ、翻訳本にしました。

これらの本が出来るまでには、様々な皆さんの協力がありました。下田印刷所による、丁寧かつ廉価な小部数印刷のお陰で、これらの本を安い価格で販売でき、赤字が減りました。また、渡辺真木さんは、膨大な時間を割いて、手書き原稿をワープロに入力して下さいました。そして、テニス仲間の河野みち子さんは、私の本のために素晴らしい挿絵を描いてくれました。

私の翻訳本を読んで下さった、ある外国人の方からいただいた賛辞は、人生無上の喜びになっています。わずかでも、国際交流に役立てば、という心境です。ですから、売り上げの一部をユニセフに寄付することにしました。“ONE LUMP～”は売り上げの半分を、“TOKIYORI”は売り上げの8.3%を寄付しています。

私は、趣味として、心の支えとして英語に関わりつづけてきました。そして、翻訳を通じて、心

の“解放”という最高の幸せを得ました。私の思いが詰まった、この2冊をお読みいただければ幸いです。

*なお、購入を希望される方は、沢田までご連絡下さい。〒189-0026 東村山市多摩湖町4-22-11、電話・FAX 042-393-9865

[沢田カヨ子]

『大正・昭和 琉球諸島地形図集成』

柏書房、1999年、70,000円、B2版、総65頁
〔『解題』付き〕

柏書房発行の地形図集成シリーズの最新版。この集成は、お茶の水女子大学地理学教室所蔵の戦前の琉球諸島地形図を、一般に活用してもらうため、印刷、出版された。お茶大地理学教室には、琉球諸島だけでなく、戦前の台湾、満州、中国大陸などの、いわゆる外邦図が所蔵されている。これらは、浅井辰郎元教授のご努力、ご苦勞により収集、購入されたものである。その内容や経緯、またその意義については、すでに浅井先生が簡潔に紹介されている(浅井 1972、1999)ので、ここでは簡単な紹介にとどめたい。

本書に収録された琉球諸島地形図は、大正から昭和初期にかけて、旧日本陸軍参謀本部陸地測量部により、測量、作成された。これらの地形図は、戦中、軍事的な理由により「極秘」扱いされ、一般の目に触れることがなかった。また、戦後は、その多くが処分され、あるいは散逸したため、現存する地形図は非常に少ないようである。

さて、収録図は、琉球諸島の5万分の1および2万5千分の1地形図など、合計58葉ある。まず、全体図として、沖縄本島とその周辺、宮古列島、八重山列島、さらには、尖閣諸島がある。次に、5万分の1地形図としては、沖縄島とその周辺(与論島、那覇、久米島など)、魚釣島、宮古島、石垣島などがある。そして、2万5千分の1地形図としては、沖縄本島南部がある。これらの地形図は、かつての、この地域の姿をよく伝える貴重な資料である。この地形図群を眺めれば、様々なことが発見でき、興味が尽きない。特に、現在の沖縄本島は、第二次世界大戦末期の激しい戦火と戦後の大規模な地形改変により、戦前とはまったく異なる景観となっているため、これらの地形図

を見ると、かつての沖縄の姿が手に取るように分かる。たとえば、沖縄本島の一般的な集落形態は、網の目のような道路網を基本に構成されていた、コンパクトな集村、地割制集落であったと分かる。近代末期の姿とはいえ、琉球王国当時の景観を伝えているのではあるまいか。

また、『解題』には清水靖夫「沖縄県の地形図について」、浅井辰郎「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか」、小林茂「地形図と南西諸島の近代」、安里進「近世琉球の地図製作と戦前作製の琉球諸島地形図」の4論文が収録されている。特に、浅井論文は、外邦図が戦後どのように残されたかが分かり、多いに参考になった。なお、お茶大所蔵の外邦図について、浅井先生は「現在はなぜか鉄柵や床上に積み重ね上げられ、傷みやすく使いにくい」と苦言を呈しておられるが、もっともであり、恐縮するしかない。余談になるが、先頃、東北大学理学研究科へ集中講義にお邪魔した際、地理学教室所蔵の外邦図を見せていただいた。お茶大の外邦図の“兄弟分”である。新しく建設された自然史標本館の地図室にあった。お茶大の整理・保存状況とは比較にできないほど、非常に良く整理、保存されていた。お恥ずかしい限りである。私の母校、京大でも、総合博物館（旧・文学部博物館）開設に伴い、文学部地理学教室所蔵の地図群が整理、保存された。つまり、予算と人手の問題である。小規模校のお茶大に、旧帝大レベルの予算が付くとは考えられず、総合博物館が設置される見込みもないため、少しずつ手作業で整理、保存するしかないと考えている。

文献：

浅井辰郎（1972）「東半球大縮尺図のことども」お茶の水地理13

浅井辰郎（1999）「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか」本書『解題』

[内田 忠賢]